『東京大学言語学論集』32 (2012.9) 245-254

津軽方言の推量形式「ビョン」の意味変化に関する解釈

大槻 知世

キーワード：津軽方言 推量形式 ベ ビョン 終助詞 オン 意味変化
Perspectivization

要旨

本論文では、青森市津軽方言の推量形式の一つである「ビョン」が意味変化を経験したと思われることを報告し、その変化の仕組みを考察する。田附(2008)によると「ビョン」は「ベ」と「オン」に由来する。「ビョン」はかつては町の女性が用いる上品なことばであった。しかし、現在は町や村、男女を問わず用いられ、断定的で押し付けがましく響くこともある。この変化を、「ビョン」の起源の一つと考えられる「オン」の変化によるものと考える。すなわち、「オン」はもともと女性語であり、断定を避け語調を和らげる働きをもっていたが、しだいに、意味の一部がパースペクティヴ化(Perspectivization)を受けた結果、むしろ断定的で一方的な伝達の形式に変化したと考えられる。

1. 本論文の考察対象

本論文は、津軽方言の推量形式の一つの「ビョン」が昔と今とで意味の異なることを報告し、その意味変化の仕組みを考察するものである。津軽方言の「ビョン」は、基本的に活用語の終止形に接続して、「～だろう」という意味を表す。津軽方言の推量形式には、関東から東北にかけて見られる「ベ」もある。この「ベ」と「ビョン」の違いを明らかにしようとした先行研究が田附（2008）である。田附は「ビョン」の起源について先行研究[1]を踏まえて一定の説明を加えている。すなわち、「ビョン」は「ベ」に形式名詞「モノ」由来の終助詞「モノ」あるいは「オン」が付いたものであるとする。本論文はこの点で田附を支持し、「ビョン」の意味変化を「オン」の意味変化の影響によるものとして説明する。

2. 調査について

本論文は、筆者が 2011 年 6-9 月に行った青森市での予備調査と自然談話観察、南津軽郡田舎館村での臨地調査、そして文献調査に基づく。予備調査は 60 歳代男性 2 名を、臨地調査は 70 歳代女性 2 名を対象とした。自然談話観察は青森市内のデイケアサービス施設にて行った。また、若年層の「ビョン」の使用頻度[2]を見るために青森市の 23 歳女性にも面談調査を行った。

[1] 秋田県米代川流域を調査した佐藤喜代治（1963:38-39）は、雄勝地方に「ビョン」「ベオン」「ベモノ」「ベオ」等の類似した形態が分布していることに注目し、北条忠雄（1961:173）の「ベオンはベーモノの短縮で」あるという記述にヒントを得て、それら諸形態の原型は「ベモノ」であるとしている。

[2] このほか、本文では直接利用しないものの、2011 年 9 月に青森市内の高校生 66 人（男子 29 人、女子 37 人）を対象にアンケートを実施した。アンケートでは、「ビョン」が使われるのを聞いたことがあるか、自分では

さらに「ビョン」が用いられた場合に聞き手がどのような含意を読み取るかを確認するため、青森市の30歳代女性にも協力してもらった。インフォーマントの詳細は次節に記す。

3.　インフォーマントについて（年齢は調査当時）

青森市での予備調査のインフォーマントは60歳男性Aと67歳男性Bである。両氏とも言語形成地は青森市以外の津軽地方である。A氏は言語形成期に秋田県北部で暮らした経験がある。二人とも大学時代を東京都で過ごし、就職後は転勤で東日本・北日本各地に住み、壮年期以後調査当時まで青森市に居住している点で共通している。

南津軽郡田舎館村のインフォーマントは、76歳女性Cと77歳女性Dである。C氏は黒石市（弘前市の東）で言語形成期を過ごし、20歳で嫁いで以来調査当時まで田舎館村に住んでいる。D氏は南津軽郡藤崎町で生まれ、17歳以来調査当時まで田舎館村に居住している。

青森市の23歳女性Eの言語形成地は青森市である。大学時代は東京都に、就職後調査当時までは青森市に居住している。青森市の30歳代女性Fは青森市のはえぬきである。

4.　「ビョン」の意味の変化

調査によって、「ビョン」は意味の変遷を経たらしいことが分かった。まず、かつての「ビョン」に関する記述を確認すると、北山長雄(1933)は「ベオン[3]」を「女性に用ゐられ」ることばであるとしている[4]。さらに、臨地調査のインフォーマントである田舎館村の76歳女性は「ビョン」について町の上品なことばであると述べた[5]。以上を併せると、かつて「ビョン」は町の女性に用いられる上品なことばであったと考えられる。

一方、今の「ビョン」に関して話者は、「不確かさが消えて断定的な意味合いが強くなる」(B氏)ものの、「少し押し付けがましく響くこともある」(B氏)と答えた。若い世代においても同様の意識があり、30歳代のF氏は「ビョン」による推量を、「根拠はあまりなくて、いいかげんな感じがする」と述べた。さらに、20歳代のE氏は同世代が「ビョン」を用いることについて「すごく訛っている感じがする」と述べた[6]。いかにも方言色の強いものとして捉えているようである。さらに、「ビョン」は現在では老若男女を問わず用いられる傾向がある。要するに、今の「ビョン」は、都市部・農村部に関わらず、かつ性別を問わず用いられる。そして、断定的な押し付けがましさやいい加減さといった含意を帯びていると感じられているようである。今の「ビョン」の含意を示す例として(1)-(2)を挙げる。デイケアサービス施設で観察した自然談話であ

「ビョン」を使うか、等の意識について聞いた。高校生では「ビョン」は先輩に対しては使いにくいということが明らかになった。

[3] 「ベオン」は「ビョン」のバリエーションである。

[4] 津軽方言以外で「オン」と「ベオン」をともに用いる秋田県北方言では、中山健（2001:1440）による「べもの・べおん・びょん」の項に、「推量の助動詞べ（無活用型）に、詠嘆の助動詞モノ（→オン→オ）が付くと、丁寧な心態が表出される。モノの柔らかな音感に伴う情感によるものであろう」とある。

[5] このように述べながらも、今の若年層が用いる「ビョン」について、上品なものであるという意識は特にはないようであった。

[6] 共通語による例文を津軽方言訳してもらう調査も行ったが、E氏は「ビョン」を全く使わなかった。津軽方言語彙の使用がほとんど観察されず、発音上も方言的な特色（鼻濁音、前鼻音を伴う閉塞音等）が聞かれなかった。

る。

(1) [すりガラスの窓越しなので二人とも外の様子は分からない]

X:イマ	アメ	フッテラベガ
今	雨	降ってるかな
Y:イマ	アメ	フッテラビョン
今	雨	降ってるでしょ

(2) [(1)の会話から 10 分ほど後に]

X:イマ	アメ	フッテラベガ
今	雨	降ってるかな
Y:イマ	アメ	フッテネビョン
今	雨	降ってないでしょ

二人とも外が見えない状態でである。Y 氏はいずれの場合も窓の外を眺め、すりガラスから少し透けて見える空の色を目にしている。A 氏も同じ光景を目にしたと思われる。なお、いずれの場面でも雨音は聞こえなかった。このため、根拠になるのは視覚情報のみであると考えられる。仮に空の色を根拠に(1)を発したとすれば(1)については首肯できるとしても、空の色が依然同じである(2)では何を根拠として「雨が降っていない」という判断を下したのか不明である。つまり、(1)-(2)は根拠が明確ではなく、いわばいい加減さがある。このように、例(1)-(2)は先の話者 F 氏のコメントを裏付ける実例である。

次節以降では、「ビョン」の意味変化が、これから確認する「オン」の意味変化によるものである可能性を示し、意味変化の仕組みを説明する。

5. 「オン」のもつ主要な意味の変遷

「オン」も意味変化を経験したと考えられる。先行研究を見ると、此島正年（1968 :145）は「オン」を「ていねい」「やさしくて、女性語」と紹介している。先の B 氏（弘前市[7]出身）も、「オン」は「女性的で丁寧な印象」であると述べた。要するに、もともと「オン」は弘前など町方の女性が直接的な物言いを避けるときに文末に付けられる形式であったと考えられる。

ところが近年では、「オン」は「対話場面において、事実や話し手の判断を一方的に伝達する」（田附 2008:55）形式とされている。ここで「一方的に伝達する」とは、①情報を聞き手が知らない、あるいは既知であっても聞き手の中で活性化されていない、と見なした話し手が、その見なしに基づいて②聞き手の反応を伺うことなしに伝達する、という①②をともに満たすことであると思われる。この分析には此島の記述や B 氏のコメントのような「丁寧」「女性語」等の要素はない。

伝達内容である情報を聞き手が知らない、もしくは活性化していない場合（①を満たす場合）

[7] 弘前市はかつて津軽藩の都として栄えた城下町であり、津軽地方の文化の中心地である。

であっても、聞き手の反応を伺う必要がある場合（②を満たさない場合）は、次例（田附2008:54(33)）のように「オン」を使用することができない。

(3) [友人宅に数人で遊びに来ている。その仲間に対してお暇しようと音頭をとって]

*サー	ソロソロ	イグオン
さあ	そろそろ	行くよ↑[8]。

このような文脈で仲間に帰ろうと促したい場合、一般的には仲間の反応を伺いつつ発言する必要がある。しかし、(3)とほぼ同じ文を、聞き手の反応を伺わずに、つまり一方的に伝達する場合は次の(4)（田附2008:55(33)''）のように適格な文になる。

(4) [友人宅に一人で遊びに来ている。そろそろお暇しようとして]

へバ	ソロソロ	イグオン
じゃあ	そろそろ	行くよ↓。（↓：下降イントネーション）

先の(3)とは異なり、(4)における聞き手は話し手の訪問相手（友人）である。(4)のような場合においては、聞き手の反応を伺う必要は(3)ほど高くないのが普通であろう。このように「オン」は、ある情報が聞き手にとって未知、あるいは、既知であっても活性化されていないと思われる場合、かつ聞き手の反応を伺う必要はないと話し手が見なす場合に用いる形式なのである。

以上のことをまとめると、次のようになる。「オン」はもともと町方の女性が直接的な言い方を避けるために用いる形式であったが、今はその用法で使われることはほとんどない。むしろ、次第に命題を一方的に伝達する形式へと変わりつつあると言える。

5.1 「オン」の意味変化の手がかり

「オン」の意味変化の手掛かりを考える。現在の「オン」は、「一方的に伝達する」という点で、「丁寧」さとはかけ離れているように思われる。というのも、丁寧さを聞き手への配慮と解釈するならば、それには主に二種類あり、現在の「オン」の「一方的伝達」は、そのうちの一つに反していると考えられるからである。具体的に聞き手への配慮には、まず一点目に、伝達する際に「だ」「である」といった常体ではなく「です」「ます」といった敬体を用いるといったスタイル的な配慮がある。二点目として、伝達しようとする命題が聞き手にとって新しい情報であると思われる場合、日本語においては断定的な表現を避けて、推量表現等を付けたりする傾向が見られる[9]。要するに、現在の「オン」は断定的

[8] 例文(3)(4)ともに共通語訳は同じであるが、発話場面では(3)の共通語訳を上昇調で、(4)の共通語訳を下降調で発音し分ける。なお、津軽方言の「オン」には下降調しかない。

[9] 「情報のなわ張り理論」を提唱した神尾(1988:56)によると、日本語の直接形(推量形式などを用いずに命題を直接提示する形)は、は「情報が話し手のなわ張り内に独占されている」ことを含意する。そして、「情報の話し手による独占化は一般に日本文化の下では好ましい印象を与えない」ため、日本語では直接形を用いることができる状況であっても、

印象を与えるという点でこの二点目に反している。それゆえに丁寧さを欠いていると感じられるのだろう。

5.2 「オン」の意味の変遷の仕組み

津軽方言の「オン」は元は形式名詞「モノ」であり、それが終助詞化したものであると考える[10]。

「オン」の変遷を再度確認する。もともと「オン」は町方の女性が直接的な表現を避ける場合に用いる形式だった。しかし、現在ではそのようなものとして使われることが稀になり、使われるとしても、従来の意味と異なり一方的伝達を表す形式に変わりつつある。本来的な用法は直接的な表現を避けることにあったが、現在ではそれが薄れて「押し付けがましい」ともとられる一方的伝達を表すようになってきているという点で、かつての「オン」と現在の「オン」は相容れないように思われる。それでは、このような乖離は一体どのように説明することができるだろうか。

おそらく、此島（1968）と田附はどちらも正しいと思われる。此島の記述や、B 氏による「『オン』は優しくて丁寧な女性語」というコメントに少し解釈を加えると、問題は解決できるだろう。思うに本来は、町方の女性が、「聞き手はこの情報を知らないかもしれないが、もし知らなくても気まずい思いをしないように」といった配慮を表すために、文末に「オン」（あるいは「モノ」）を添えていたのではないだろうか。そして、この「たとえ聞き手がこの情報を知らなくても差し支えない」という要素が、しだいに支配的になってきたのだと考えられる。そして、聞き手に一方的に伝えるという意味合いが強くなるとともに女性語としての性質が意識されなくなり、男性にも使われる語になったのであろう。

このような「オン」の意味変化は広義の narrowing (Fortson 2003:649-650)と見なすことができる。しかし、女性語だった「オン」が男性にも用いられるようになるなど、寧ろ広がりをもって変化していることから、narrowing では必ずしも適切に捉えられない。すなわち、「オン」に起きた変化のプロセスをより微視的に説明する考え方として Dirven（1982）による Perspectivization（以下「パースペクティヴ化」と呼ぶ）を導入する。パースペクティヴ化というのは、ある語の意味（フレーム）を構成する複数の概念の各々をドメインといい、フレームの中の特定のドメインのみを立ち上げることである。例えば、英語の *Monday* という語は「一週間のうちの特定の位置にある曜日」「休日の翌日」「仕事に戻らなくてはならない日」等のドメインをもつが、これらのドメイン全てが常に活性化されるわけではない。*Monday-morning feeling* と一般的に言うときの *Monday* は必ずしも月曜日それ自体を指さず、ここでは「仕事に

直接形そのものを避けるような表現が用いられる。

[10] ここで、共通語に多く行われた「もの」と津軽方言の「オン」を一括りに扱うべきではないという反論も考えられる。しかし、「オン」が町方の上品な言葉であった事実を思い出されたい。弘前市の高年層におけるあいさつ表現その他を調査した渡辺（1994:362）によれば、弘前市の旧士族を出自とする層では「共通語と一致する表現や共通語形が多くみられる」という。そうであるならば、共通語の「もの」が旧士族層の女性を通して津軽方言にも終助詞として取り入れられた可能性も考えられるかもしれない。

戻らなくてはならない日」というドメインだけがパースペクティヴ化されている[11]。

「オン」についても同様に説明できる。まず、日本においては情報の独占を含意するような断定表現を避ける必要が生じるとする。次は断定表現を避けるための方策を探すことになる。そこで町方の津軽方言においても、断定表現を回避する手段の一つとして「オン」(<「モノ」)が選択された。そして「オン」は「命題の真偽についての責任主体が話し手／聞き手以外のどこかにあるかのように装うこと」という機能を帯びるようになり、婉曲表現として固定化した。これで「オン」の本来的用法の一部である「婉曲表現」の派生過程が説明できる。

それでは、もう一つの本来的用法である「女性語」はどのように得られるだろうか。ここで再び日本文化という土台が生きてくる。つまり、断定的な表現を避けることが好まれる日本文化では女性は婉曲表現を用いた方が女性らしいという評価を受けると考えられる。このため、婉曲表現が女性らしさと結びつくことは自然であろう。また先のB氏のコメントに見える「丁寧」という要素も女性らしさと婉曲表現との関連で説明できる。すなわち、町方の言葉が一種の威信を持っていると考えれば、その中で聞き手を配慮した女性らしい婉曲を表すとされた「オン」が丁寧さ、ひいては上品さを表すようになったと言えるのではないだろうか。

ここまで述べたことをパースペクティヴ化の観点で言い換えると、1「断定を避けること」というドメインから、さらに三つのドメイン 2「命題の責任主体が話し手／聞き手以外のどこかにあるかのように装うこと」3「女性らしさ」および4「丁寧さ」が派生した。これら四つが昔の「オン」の本来的意味を構成するドメインであると考えられる。

しかし、時代が下るにつれて、四つのドメインの内の一つ、すなわち 2「命題の責任主体が話し手／聞き手以外のどこかにあるかのように装うこと」がパースペクティヴ化され、残る三つのドメイン1「断定を避ける」3「女性らしさ」および4「丁寧さ」は活性化されなくなる。このようにして、現在の「オン」が持つ主要な意味への集約が始まるとともに、「オン」は男性にも用いられるようになったのだろう。2のドメインだけを活性化する用法が広まるにつれ、2から派生的に「命題に対する話し手の無責任さ」が生じ、さらに「聞き手が命題を知っていようがいまいが構わないこと」が派生する。最終的に「聞き手が命題を知っていようがいまいが構わないこと」から「命題を一方的に伝達する」が派生する。このような過程を経て、「聞き手が命題を知っていようがいまいが、事実はこうである」という意味に拡張された結果、現在の「オン」が持つ一方的伝達の用法が成立したと考えられる。

上述の「オン」の意味の集約を整理して図示すると次図のようになる。

[11] 以上の説明は Taylor (2003:93-94)より。

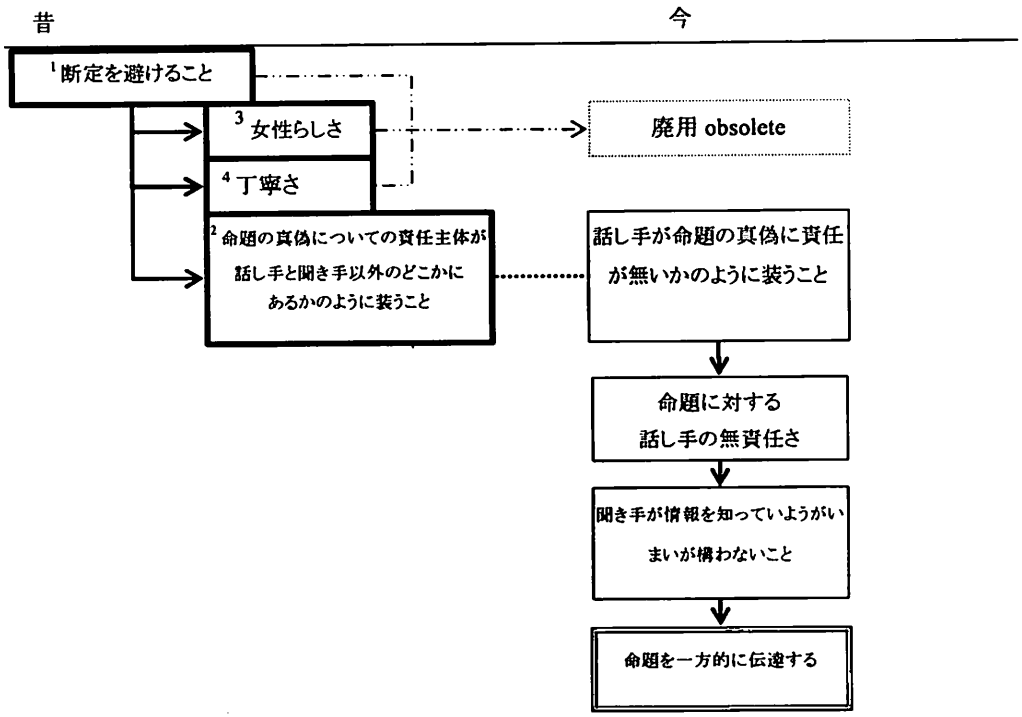

図 1　津軽方言の「オン」の意味の集約：断定回避から一方的伝達へ

（太枠は初期のドメインを、二重枠は現在のドメインを表している。実線の矢印は派生関係を、点線は内訳を表し、鎖状線（－・・－）は廃用[12]へ向かう流れを表す）

したがって、田附の解釈も、突き詰めてみれば「オン」のもともとの用法（上記 1-4）の一部分（上記 2）に着目したものだと言うことができ、それゆえ、丁寧な婉曲的表現という「オン」の本来的な用法と一見矛盾しているようでありながら、実は両者は同じものを別の観点で見ている可能性があるということが分かった。

5.3 「ビョン」に残る「オン」の影響

本節では、先に考察した「オン」の意味の集約が、「ビョン」の意味に継承されたことを確認する。ただし、便宜的に「継承」という言葉を用いたが、先述のような「オン」の意味の集約が完了してから「ベオン」（＞「ビョン」）が成立したとは限らない。むしろ、「オン」の変化と「ビョン」の使用の拡大は同時進行していたと考えるほうが自然であろう。

さて、北山が記したように、「ビョン」あるいは「ベオン」も、もとは町方の女性が使う丁寧な推量表現だった。しかし現在では男女を問わず使われており、丁寧な表現という意識は薄れている。『方言談話資料(3)』（国立国語研究所 1980:47）から実例を示そう。話者は明治 36 年生

[12] 青森市の若年層では使用が確認されなかったため、おそらく青森市では廃用に向かうと思われる。しかし、田舎館村では「オン」の使用が確認されたので、所により廃用よりは稀用としたほうが適切である。

まれの男性で青森市牛館（旧農村部。青森駅から南に 6km）の生え抜き、調査当時 76 歳である。表記は同資料に従った。

(5) アコダバ　キット　クラス　エガビョンテ。
　あそこならきっと暮らしがよいだろうと（言って）。

例(5)は、昔の農村地帯では家の軒先に積まれている稲叢の大きさが暮らし向きの良さを表したという話の後の文である。この例の「ビョン」は推量表現として用いられており、その部分では本来の「ビョン」の機能を受け継いでいる。その一方、話者が青森市内旧農村部の生え抜きの男性であることから、少なくとも 1980 年には「ビョン」の使用がもはや町方の女性に限定されていなかったことが分かる。つまり、「ビョン」の由来である「オン」の初期のドメインのうち、「女性らしさ」のドメインは活性化されなくなっていたと考えられる。

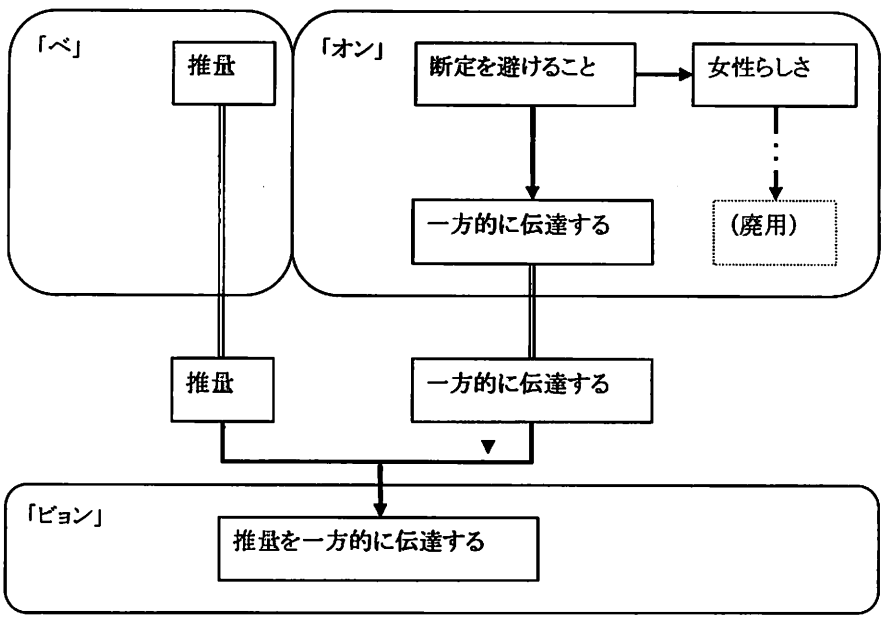

図 2　「オン」の意味の「ビョン」への継承

要するに、「オン」において初期のドメインの中でパースペクティヴ化された 2 から「聞き手が命題を知らなくても構わない」という要素が派生した。そして、「ベ」に「オン」が後続して「ビョン」になるにあたって、「聞き手が命題を知らなくても構わない」、ひいては「命題を一方的に伝える」というドメインが継承されたのだろう。その結果、現在の「ビョン」は、「聞き手が推量の根拠を知っていようがいまいが、根拠を基に判断すれば当然こうなるだろう」という意味を表すと考えられる。実際に今の若年層が「ビョン」を使う場合の意識としては、筆者の調査によれば、「聞き手が命題を知らなくても気まずくないように」という婉曲的な配慮より

も、むしろ、4 節で言及したように、「自分の推量の根拠を聞き手が知らなくても構わない」という一方的な意識の方が優勢のようである。

6. 結論

本論文では、津軽方言において従来報告されなかった「ビョン」の意味変化を報告し、その変化の仕組みを考察した[13]。つまり、「ビョン」およびその構成要素である「オン」は、町方の上品な女性語から男女・地域（ただし津軽地方内）を問わず用いられる語へ変化したことが分かった。これに伴い意味においても変化が見られた。この変化は、フレームにある複数のドメイン中の特定のドメイン「命題の責任主体が話し手／聞き手以外のどこかにあるかのように装うこと」以外のドメインが非活性化すると同時に、そこから現在の意味につながるドメイン「命題を一方的に伝達する」が二次的に発展したものとして説明することができる[14]。

参照文献

Dirven, Rene. Goossens, Louis. Putseys, Yvan. and Vorlat, Emma. (1982) *The Scene of Linguistic Action and its Perspectivization by Speak, Talk, Say and Tell*. Antwerp: John Benjamins.

Fortson IV, Benjamin W. (2004) "An Approach to Semantic Change" In Brian D. Joseph and Richard D. Janda. (eds.) *The Handbook of Historical Linguistics*. 648-666. Malden, Massachusetts: Blackwell.

藤原与一（1982）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究』上．東京：春陽堂書店.

藤原与一（1986）『方言文末詞〈文末助詞〉の研究』下．324-342．東京：春陽堂書店.

藤原与一（1997）『日本方言辞書―昭和・平成の生活語―』下．534．東京：東京堂出版.

舩木礼子（2007）「推量とその分布」『日本語学』26：148-155.

平山輝男編『現代日本語方言大辞典』第 1 巻．37-57．東京：明治書院.

平山輝男編『現代日本語方言大辞典』第 5 巻．4388．東京：明治書院.

北条忠雄（1961）「秋田」東条操監修『方言学講座』第二巻．149-176．東京：東京堂.

本多啓（2007）「副助詞タリの用法 A Note on the Japanese Adverbial Particle *Tari*」『駿河台大学論叢』第 33 号．1-18.

神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』東京：大修館.

北山長雄（1933）『津軽語彙』私家版.

国立国語研究所(1980)『方言談話資料(3)―青森・新潟・愛知―』10-135．東京：秀英出版.

国立国語研究所(編)(2002)『方言文法全国地図』第 5 集―表現法 2―．東京：大蔵省印刷局.

[13] なお、「ビョン」に生じた変化は意味変化というよりはむしろ、いわばレジスターの変化に過ぎないのではないかというご指摘を中山俊秀先生から頂いた。もちろんレジスターが変化したことも「ビョン」の変化に関係がある。しかしレジスターの変化と意味の変化とは密接な関係をもち、表裏一体とも言えると考えるため、レジスターの変化も重要な要素ではあるが、それだけで説明をすることは積極的には選び難く思われる。

[14] 本稿では意味変化のプロセスを、本多（2007）で言う緩衝効果（断定の回避）から始まるものと考えた。一方、本多は副助詞タリの用法（「もしかしてご存じだったりしますか?」本多 2007: 1）について、偶然性（必然性の欠如）を出発点とし、緩衝効果を生じるものであるとする。つまり、緩衝効果を起点とする本稿のプロセスと逆方向のプロセスを提示している。ただし、「オン」の意味変化を本多（2007）と同様のプロセスで考察することができる可能性もあるかもしれない。これについては今後の課題とする。

此島正年（1954）「青森方言の敬語法」井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎（編）『東北方言考①　東北一般・青森県』日本列島方言叢書②：192-198．東京：ゆまに書房．（『弘前大学人文社会』5号(S29・12)所収論文の再録）

此島正年（1968）『青森県の方言』新版．144-147．弘前：津軽書房．

中山健（2001）『語源探究秋田方言辞典』1440．秋田：語源探究秋田方言辞典刊行委員会．

佐藤喜代治（1963）「秋田県米代川流域の言語調査報告」東北大学文学部日本文化研究所（編）『日本文化研究所　研究報告別巻　第一集』1-47．仙台：東北大学文学部日本文化研究所．

田附敏尚（2008）「青森県五所川原市方言における推量形式『ビョン』について―『ベ』との対比をもとに―」日本語学会2008秋大会発表要旨．49-56．

Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization*. Third edition. Oxford; Tokyo: Oxford University Press.

寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』東京：くろしお出版．

渡辺修平（1994）「弘前市の高年層における位相的変異再考―あいさつ表現・親族名称・台所語彙の比較―」小野米一(編)『ことばの世界：北海道方言研究会20周年記念論文集』北海道方言研究会叢書第5巻．350-363．北海道方言研究会．

On Semantic Changes of the Word "*byoN*" in Tsugaru Japanese

OTSUKI Tomoyo

Keywords: Tsugaru Japanese, Epistemic modality, *be*, *byoN*, Semantic change, Perspectivization

Abstract

In Tsugaru Japanese, *byoN* is used as one of the forms of epistemic modality. The form *byoN* is said to have originated from the combination of *be*, which is used in large areas from the Kanto region to the Tohoku region, and *on*, which is attached to the end of sentences. In this paper, it is made clear that *byoN* went through some semantic change. That is, though *byoN* was once a polite epistemic modal that women in urban areas used, it no longer implies politeness, and has a slightly different meaning. In addition, it is now widely used in many areas and by both men and women. In order to explain the mechanism of this change, I applied to the particle *on* the notion of Perspectivization (Dirven 1982), concluding that the change in *on* may have affected *byoN*.

（おおつき・ともよ　東京大学大学院）